

第20回 山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

| | |
|-----|--------------------|
| 演 題 | こりやうまくねえなあ |
| 副 題 | チームケアによる経口摂取への取り組み |

| | |
|------------|-----------------------------|
| フリガナ | カツヌマナーシングセンター ツウショリハビリテーション |
| 施 設 名 | 勝沼ナーシングセンター 通所リハビリテーション |
| フリガナ | カイゴフクシシ ワタナベ トモキ |
| 発表者(職名・氏名) | 介護福祉士 渡邊 智規 |
| フリガナ | ツウショリハビリテーション ショクインイチドウ |
| 共同研究者 | 通所リハビリテーション 職員一同 |

【はじめに】

食べるという事は生命・健康の維持には無くてはならないものである。また、好きなものを食べたり、家族、友人と一緒に食事をする事で喜びや、幸福感が得られる大切な行為である。今回、胃瘻から経口摂取へ移行し、さらにその人らしさを取り戻すことができた症例を経験した。多職種による取り組みとその経過について報告する。

【症例】

U様 79歳 要介護度4
脳幹梗塞にて嚥下障害・構音障害・両側不全麻痺あり。以前より当通所ハ利用されており、利用時のみ昼食・おやつ・水分(トロミ)摂取されていた。H27年8月に誤嚥性肺炎発症し入院。入院中は胃婁にて3食栄養摂取。ST訓練時のみゼリー摂取されていた。ぼんやりとされており表情変化乏しい、自発語もすくない。体力面も低下あり、同年12月に退院され当通所ハ再利用となる。STによる摂食訓練開始するも、6ヵ月後誤嚥性ではないが肺炎にて2ヶ月入院され、H28年7月下旬より通所ハ利用再開された。

【初回評価】

歯科医師、STによる口腔機能評価、プリンを用いたフードテスト実施。軽度ではあるが、全体的な体力、筋力低下あり。咽頭の感覚低下、飲み込みの弱さがみられ、言葉がはっきりしない様子がみられた。フードテストは嚥下あり、ムセ、呼吸変化なしであった。今後以下の取り組みを行なう事となる。

【取り組み】

- ① 歯科医師による、嚥下状態の評価、摂食訓練の指導(在宅)
- ② 歯科衛生士による口腔ケアの指導(在宅)
- ③ 管理栄養士によるカロリー管理、栄養状態の確認(在宅)
- ④ 言語聴覚士による口腔機能、摂食訓練(プリン)
- ⑤ 理学療法士による体力の向上、歩行訓練
- ⑥ 介護員による個別嚥下体操、口腔ケア

【経過】

プリンでの摂食訓練問題なく経過され、9月上旬バナナでの摂食訓練開始。9月下旬VF検査実施、10月上旬より全粥・中キザミ・水分薄いトロミにて昼食摂取開始。ミキサー粥で交互嚥下行なう。11月上旬副食を姿食へ変更。翌年2月麺類の提供開始、交互嚥下offとする。5月に法事にて外出され、ビールを少量飲んだと本人から報告有り。6月に娘宅にてとうもろこし摂取。7月には家族とラーメンを食べに行かれた。「トロミが濃い」と訴えあり、薄いトロミよりもトロミ削減らす。

【現在の様子】

食事は見守り下にて、やや咀嚼少ないものの問題なく摂取できている。介入当初は何を食べても「おいしい、おいしい」と摂取されていたが、現在は「今日のはうまくねえなあ」と好き嫌いや好みなどの訴えも聴かれている。誤嚥性肺炎にて入院される前も「うまくねえなあ」と言われながら食べていたのでU様らしい様子が見られるようになった。他者との関わりの中でも、冗談や思い出話も多く聞かれ、ネックレス・指輪など付け身なりを気にされるようになった。

【まとめ】

多職種にて関わりを持ち、報告・連絡・相談をこまめに行うことで、その時々状態に合った訓練を段階的に提供する事ができた。「こりやうまくねえなあ」の一言は、食事をする場面では良いイメージの言葉ではない。しかし、それは色々な物を当たり前食べる様になったからこそ出てくる言葉だと思ふ。経口摂取ができるようになった事がゴールではなく、好きな物、食べたい物を食べたいときに食べられるようになる事が、その人らしい食事をとるという事だと思ふ。今後も、より安全・安心に経口摂取が続けていけるよう取り組みを継続していく。

